日本に広がるオーガニックフラワー

橋本力男さんの取り組み

三重県津市白山町の橋本力男さんを訪ねました。

農林水産省の「農業技術の匠」に選出されたこともある橋本さんは四十年あまりのキャリアを持つ有機農家であり、堆肥づくりの名人として知られています。ご自身が野菜の有機栽培をするなかで行き詰まったことをきっかけに堆肥作りをはじめ、技術を確立し、その後は堆肥の販売、生ごみ堆肥化のコンサルティング、海外での堆肥作り指導、講演など、多岐にわたって活動されてきました。

橋本さんは二〇〇七年から農薬・化学肥料を使わないオーガニックフラワーの栽培をされています。現在は自宅横にある約一五アールの畑で百二十種類の花を栽培し、そのうち約六十五種類を東京の化粧品メーカーや名古屋の生花店などに出荷されています。

二〇一七年に設立された「一般社団法人日本オーガニックフラワー協会」の理事長でもある橋本さんに、オーガニックフラワーについてのこれまでの取り組みと現状、今後の展望についてお話をうかがいました。

ヒョウタンボク

自然の循環を活かして

橋本さんは南米へ行った時のある出会いがきっかけでオーガニックフラワーを栽培するようになりました。

「二〇〇七年に堆肥作りの指導でボリビアに行き、そこで上間節男（うえま せつお）さんというオーガ

ニックフラワーを育てている日本人に出会いました。彼の一ヘクタールの花畑に亜熱帯の多種多様な花が整然と植えられているのを見た時に、あまりの美しさにものすごく感動して、『僕もやろう』と決めて、帰国してすぐオーガニックフラワーをつくり始めたんです」。

橋本さんが現在栽培されている花のおよそ八割は花木類で、枝ごと出荷する「枝もの」です。あとの二割も、宿根草や球根で毎年自然に花をつけるもので、人為的に種を播き育てるものではありません。

「植物はいちばんエネルギーが高い時に花が咲き、実がついて、子孫を残すわけです。花を育てているうちに、そのタイミングに人間があわせるのがほんらいの姿だろうと思うようになりました。今はその時にしか生えない旬の花を相手にしながらやっています。冬は少し減りますが、ほぼ年中、何かしらの花が収穫できます。花の場合、サルも関心を示さないし、イノシシが食べるものもほとんどありません。一部、シカが食べるものがあるので電柵はしていますが、九五％ぐらいは何もしなくても獣害の心配はありません」。

橋本力男さん
(右から２人目)

橋本さんの花は無肥料・不耕起で育てられています。

「基本的に草生栽培で、刈った草のマルチと養分で花を育てています。草を伸ばしすぎると株元に光が当たらず生育が悪くなるので、株元は鎌で、それ以外は機械を使って管理しています。オーガニックフラワーは自然の循環を活かして季節や地域の性質にあわせて栽培するのがいちばん理にかなっていると考えているので、それを追求する方法でやっています」。

花瓶の水がくさい

橋本さんが現在の栽培方法にたどり着くきっかけになったのが、小学三年生の時のあるできごとだそうです。

「僕が小学生の時、教室に大きな花瓶に入った花が生けられていました。花瓶の水を当番が替えるのですが、ある日、当番だった僕が水を替えた時、捨てた水のニオイがものすごくくさかったんです。花はきれいなのになんでこんなにくさいニオイがするのか、分からなかったんです」。

花を栽培し始めた橋本さんは、ふたたびこの疑問に直面します。そしてさまざまな実験を始めました。その結果あることが分かったそうです。

「肥料や堆肥を使っている花は花瓶に入れてしばらくすると腐り、山の木など無肥料のものは腐らないんです。腐らないということは『長持ちする』ということです。それがわ

かってからは僕の畑では堆肥を入れるのをやめ、さらに耕すのもやめて、三年ぐらいたったころから水に挿していてもいつまでも腐らなくなりました。これが僕のオーガニックフラワー栽培の出発点になっています」。

橋本さんの畑に咲いていたピンクオオデマリ

その考え方は『畑できれいな水をつくる』ということに集約されるといいます。

「作物を作るということは『畑できれいな水をつくる』ことだ、というのが僕の持論なんですよ。それは植物の体は約九〇%が水分で、水を吸って大きくなっているのだから、『畑の水を汚してはいけませんよ。畑に腐るものを入れたらだめですよ』という意味です。うちの花はふつうの花の三倍ぐらい水を吸うのですぐに水がなくなります。それだけ呼吸が激しく生命力が高いんです。いっぽうで、肥料をたくさん吸って育った花は茎が腐ってきて切り戻しをしないといけなくなります。そして水も腐って、ひどく臭いニオイがするんですよ」。

花と農薬

花に使われている農薬の現状についてうかがいました。

「花に使用される農薬の量は野菜と比べて二倍から三倍と言われています。例えばキクは毎年最低限度の量が必要なので作り続けられていますが、連作するために畑では土壌消毒が繰り返されています。花は食べものではないので残留農薬の基準が決められておらず、花屋さんがゴム手袋をせずに仕事していたら手がズルズルに荒れるほどの農薬が残っていることもあります。農家を農薬の害から守るために散布基準は決められていますが、残留農薬の基準がないために結果的に『どれだけまいてもいい』ということになってしまいます」。

花に残留した農薬の危険性にいち早く着目したオランダでは、病院にはＭＰＳ(※注)という認証基準のラベルがついた花しか持ち込めないようになっているそうです。オーガニックフラワーはそのオランダで二十五年ほど前に始まったと言われています。

「日本でも呼吸器から吸い込んだり皮膚に吸着したりして、農薬の被害で辞めていく生産者や花屋さんが結構いるんです。そういう現状に対してもオーガニックフラワーの価値はあると思っています」。

オーガニックフラワーで耕作放棄地をよみがえらせる

橋本さんはオーガニックフラワーを耕作放棄地問題の解決と中山間地に仕事を生む種にしたいと考えているそうです。

「野菜の生育に適した土のpHは大体6から6.5の間なんですが、花は4.5から5.5ぐらいなんです。つまり『やせていないといい花はできない』ということです。養分が残った畑で栽培するとすぐに腐ってしまう花しかできないから、僕の畑ではソルゴーを栽培して花が咲いたら刈り取って畑からぜんぶ出してしまうんですよ。そうやって養分を吸着させて畑の外に出すんです。耕作放棄地は、長く肥料も入れず繁茂した雑草が土の養分を吸収して土が痩せていることが多いので、水はけさえよくすればオーガニックフラワーをつくることができます」。

管理にもそれほど手がかからないと橋本さん。

「もし私がやっている方法で花木類を栽培した場合、必要な管理は年四回の草刈りだけです。肥料はやらなくてもいいし、耕さなくてもいい。必要なのはいつ草を刈ればいいかを見極める草刈りの技術だけです。植えてから育つまでの三年間は出荷できませんが、その後はずっと出し続けることができますし、方法さえ覚えれば高齢者でも出荷ができます。

東京や京都にある大手の花屋さんに置いてある生け花用の枝ものの花は、ほとんどが山から切り出されてきたものですが、取ってくる人が高齢になり、出荷する人が少なくなってきているんですよ。だから里山や耕作放棄地で花木類を作って、草刈りだけして切り枝を出荷すると。そういう流通の仕組み、オーガニックフラワーの流通経路をつくれば、中山間地の耕作放棄地の解消にもなるし、里山も生きるし、雇用も生むしという形で、オーガニックフラワーの産業ができると思うんです。そうすれば単に無農薬で花を作りたいということじゃなくて、社会的な意義も生まれてきますよね」。

生け花文化を海外へ

橋本さんはご自身でも生け花をたしなまれていますが、日本で花の業界全体が衰退していることについて話してくださいました。

「たとえばヨーロッパでは花をプレゼントしたり、ちょっと出かけて友だちのところに行く時に小さなブーケを持って行ったりする習慣がありますが、日本にはありません。

日本でもっとも花が流通しているのは結婚式と葬式、あとは母の日です。病院への花の持ち込みは『花瓶の水が腐って、そこから繁殖した病原菌が病人にとって良くないから』という理由で禁止するところが多くなってきました。生け花は昔は花嫁修業の一つでしたが、今ではそんなこともなくなってしまいました。業界全体がものすごく縮小してきているんです。

花は食べものではないので道楽や

橋本さんの畑の一角。これまで野菜を栽培していた畑で花を栽培するため、イネ科のソルゴーを栽培し養分を吸わせ、畑の外に持ち出している。

遊びみたいな感覚で見られて農家でも関心を示さない人が多いですが、お葬式や結婚式で花が飾られ、花が贈られるというのは、僕たちがそこからエネルギーをいただいているということなんですよ。花があることで満たされているんです。だから僕は日本で生け花文化を復活させ、海外にも輸出をしたいと思っているんです」。

橋本さんは自宅に華道家の先生を招き定期的に生け花教室を開催している。「生け花を習って美しさを出荷できるような生産者を育てないと」と橋本さん。

日本オーガニックフラワー協会

橋本さんは二〇一三年にオーガニックフラワーに関心のある農家や花屋、華道家などとともに「オーガニックフラワー研究交流会」を作られました。

「東京や大阪などで三カ月に一回ぐらい研究会を開催しました。多い時には三十人、四十人の人が集まってきて、『これだけオーガニックフラワーに関心のある人がいるんだ』ということが分かったんです」。

オーガニックフラワー研究交流会は二〇一七年に一般社団法人日本オーガニックフラワー協会となりました。橋本さんのほかに東京と名古屋に六人の理事がおり、農水省の後援も得ながら現在は全国各地でセミナーを行っています。橋本さんによるとオーガニックフラワーの生産者数は全国で約五十軒、そのうち出荷をしているのはおよそ三十軒だそうです。最近では、大手化粧品店がJR新宿駅東口にあるビルのフロアの一角をオーガニックフラワー売り場にするなど、その需要もじょじょに広がりを見せています。

「協会の活動目的は生産者の育成です。生産者がいないことには、いくらこれからはオーガニックフラワーだって叫んでもしょうがないんです」。

現在、橋本さんは化粧品メーカーや大学と連携しながら、福島の農業を再生させるべくオーガニックフラワー栽培支援に取り組み始めています。協会としては生産者を増やすためにオーガニックフラワーの認証事業に取り組んでいくそうです。

オーガニックフラワーについて一泊二日で集中して学べる講座を十月に愛農会で開催します。次ページ以降に詳細を記しますので、ご興味のある方はぜひお越しください。

（文・田中）

※注【MPS／Milieu Programma Sierteelt(花き産業総合認証プログラム)】…花きの生産や品質管理、環境負荷低減などの取り組みに対する、花き業界の総合認証制度。オランダ発祥。